

八木健に学ぶ滑稽俳句 5

高橋 素子

高齢社会を反映してか、最近健康食品のコマーシャルが、テレビからよく流れている。そのひとつに、次の様な格言が使われている。

四十五十は鼻たれ小僧

五十六十は花なら蕾

七十八十は働き盛り

九十になって迎えが来たならば

百まで待てと追い返す

正式な出典は定かではないが、いつまでも健康で、

生き生きと働き、学習し、人生を楽しもうとの意であろうか。

九月七日（日本時間八日）、二〇二〇年の第三十二回夏季五輪の開催都市が、一九六四年以来五十六年ぶりに、東京で開催されることが決定された。来年のことを言うと鬼が笑うといわれるが、七年後である。五輪の開催で火の付いた国民の活力でもって、一日でも早い被災地全ての復興に力をつくし、掲出の格言通り、皆揃って元気に、七年後のオリンピックの開催を迎えたい。

今回も古来の名句と師・八木健の俳句の比較により、滑稽句の学習を深めていきたい。

健康での長寿を願って、季語「生身魂」の句より比較してみたい。

古里にふたりそろひて生身魂 阿波野青畝

色恋を卒業出来ず生身魂 八木健

祖先の霊を供養するとともに、生きている年長の人たちにも礼を尽くすのが、お盆の習わしである。

帰郷した子や孫にとって、健全な祖父母や父母の顔を見ることは、この上もなく嬉しいことである。青畝はこの喜びを句に詠んでいる。

師匠・八木健の句は、大岡越前が母に「女の色欲は、何歳ぐらいまでか」と、尋ねたところ、母親は火鉢の灰をかき回して「灰になるまで」と、答えたという逸話に因んでいる。おそらく男性もそうであろうか。人の業を詠んだ哀しくも面白い師匠の佳句である。

ばばばかりと書かれし壁の干菜かな 高浜虚子

早う来てからだ焙れと炉辺の祖母 八木健

両者の季語は「干菜」と「炉辺」と異なるが、「婆と孫の句」で比較してみよう。

虚子の句は、大好きなお祖母ちゃんに叱られて、悔しくて泣きながら、「婆ばか」等と、壁に落書きしている。その傍らには、干し菜が風に揺れている。かつての村の原風景である。「虚子の句の妻さは、そこに人間が登場する事です」と、師匠は語る。

掲出の師・八木健の句も、祖母の優しさがにじみ出てくる作品である。「からだ焙れ」は一見乱暴な命令形だが、寒い中を戻ってきた孫を気遣うの言葉である。師匠は、幼いころは虚弱体質で、小学校一年生の時の遠足には、祖母が付き添っていたとのこと。そんな優しい祖母を大切に思っ、句にしたのである。言葉だけなら、「からだ焙れ」は可笑しい表現だが、優しさが透けて見えるのは、虚子の句と共通しているようだ。

有る程の菊抛（な）げ入れよ棺の中 夏目漱石

スカートをめくる給水菊人形 八木健

次は秋の花「菊の句」で比較してみたい。

漱石の句は、友の美しい妻が亡くなった。病床にあった自分には、弔問に伺うことも出来ない。せめてありったけの菊を棺に入れてやって欲しいの意であるが、この妻という女は、漱石の意中の人であったとも言われ、三十六歳の若さでこの世を去った。

この句ははじめ、**棺には菊投げ入れよあらん程**であった。「菊抛げ入れよ」の命令形の表現の中に、漱石の激した感情が集約されている。

掲出の師・八木健の句は、菊花展で見た菊師の所作に、師匠が子供の頃遊んだ「女子のスカートめくり」を思い出し、句にしたものであろう。口にするのは恥ずかしい心に映した事柄も、正直に記録して見事な滑稽句に変身させている。この句からも、師匠の人柄・滑稽心をほんの少し垣間見たような気がするのである。

マフラーを巻いてやるすこし締めてやる 柴田佐知子

手編みマフラーお誕生日の首絞める 八木健

柴田氏の句は、マフラーを巻いてあげるという優しい仕草をとりながら、相手の不誠実を恨み、懲らしめるという女心が垣間見えて、少し怖くなってくる。それだけに、マフラーを締めるという動作ひとつで、詠み手の心の内を上手く表現している。

師匠・八木健の句も、お誕生日・マフラーのプレゼント・しかも彼女の手編みという幾重にも重なる「プラスイメージ」を、首を絞めるという「マイナスイメージ」で裏切って、見事な滑稽句を形作っている。マフラーに姿を変えた己の良心に、首を絞められているらしい男心を、上手に十七音字に纏めて、読み手を思わず笑わせてくれる。